

フリガナ	シカマ クミコ
氏 名	鹿間 久美子
学 位	博士（教育学）
学位記 番 号	新大院博（教）第3号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博 士 論文名	性の健康教育における養護教諭の役割に関する理論的・実践的研究 —L.A.カーケンダールの性教育論を基本にして—
論文 審査委員	主査 教授 齋藤勉 副査 教授 井上正志 副査 准教授 雲尾周 副査 東北大学 教授 柴山直

博士論文の要旨

本論文の目的は、性教育が学校教育の中で安定した教育活動として行われるように、性教育・セクシュアリティ教育・性の健康教育の概念を明らかにすることである。そして、性の健康教育における養護教諭の職務を明確にすることにある。この論文の構成は、以下のとおりである。

第1章	前提となる諸問題
第2章	性と性教育の概念
第3章	性の健康教育の実践化における方法論
第4章	性の健康教育における「教える側」の態度
第5章	性の健康教育における養護教諭の役割の検討
第6章	性の健康教育を実践する養護教諭の育成

これまでに多くの人々から性教育の必要性が論じられてはいても、わが国においては、性教育の安定した教育活動がおこなわれていない。その理由を分析するために、性教育の概念と養護教諭の職務に注目して歴史的な経緯を確認した。そこでは、1970年代から1980年代のわが国における性教育が、医学的立場から教育学的立場へ移行した時期があることに気付いた。その結果、教育学的立場を重視する性教育の重要性を論じ、その年代にわが国の性教育に影響を与えたL.A.カーケンダール（Lester Allen Kirkendall,1903-1991）の性教育思想に注目し、理論的・実践的な研究をおこなっている。

第1章では、性教育の振り子論を論じている。第2次世界大戦後わが国では、教科に位置付けられた「性教育」と、教科以外でおこなわれた「純潔教育」との二本立てによる性教育の体制が続いていた。1964年に米で、性の概念がセックスからセクシュアリティと示されるようになった。そして、セクシュアリティ概念を論じた一人である、カーケンダールの教育学的視点における思想的な基盤に基づいて、文部省でも包括的に学校教育全体で行う性教育の一本化を図っている。

なお、カーケンダールに関する先行研究は少ない。わが国の性教育にカーケンダールがどのよ

うな影響を与えたのか明らかにされてこなかった。そこで、彼の性教育思想が、当時発刊されたわが国の多くの性教育に関する指導書などに記されていることを調査した。その結果、カーケンダールの教育学的視点における思想的な基盤に基づいて、文部省でも性教育の一本化を図ってきたことが明らかになった。

また、カーケンダールの思想研究を深めることにより、彼の人間関係性を重視した「セクシュアリティ」概念に、WHO や WAS（世界性科学学会）の「セクシュアリティ」概念を加えて、「心身相関に基づいた『セクシュアリティ』の概念の構造」を図式化することを試みている。そして、性教育・セクシュアリティ教育・性の健康教育の概念を明確に示した。なお、性の健康教育とは、「セクシュアリティ（sexuality）の事象に関する自律性（autonomy）を身につけさせる健康教育である」と定義している。

第2章では、性教育の位置関係が対極的に論じられてきたことに対して、カーケンダールとリコーナ（Thomas Likona, 1943~）それぞれの性教育論を対比の方法を使って性教育論の融合について明確にし、「性教育の二つ巴理論」と名付けている。また、具体的な教育実践の例を示すことを通して理論的な裏付けを試みている。そして、わが国の社会的な状況との関係において、「『性教育の二つ巴理論』に基づく望ましい性教育の位置」を図式化して提示している。

第3章では「望ましい性の健康教育」の実践における具体的な方法を示している。WHO が示すライフスキルトレーニングを組み入れる方法でプログラムを作成し、「教えられる側」の自律性を促すような教育方法で実践している。この実践結果から、ライフスキルトレーニングを組み入れた性の健康教育は有効な方法であることを統計的に明らかにしている。

そして、高等学校では、ライフスキルトレーニングを組み入れる方法のような、対人関係性を中心とした、性の健康教育がおこなえる能力を備えた「教える側」を育てなければならないと論じている。

第4章では、性の健康教育の「教える側」は、カーケンダールが示す「性教育の適格者の条件」が求められることを示している。

第5章では、養護教諭には性の健康教育に関してさまざまな教育支援がおこなわれてきたことに注目している。その結果、養護教諭が職務の中でおこなってきた、子どもたちへの教育的な対応の積み重ねについて論じている。そして、教育的な対応は、カーケンダールが示す「性教育の適格者の条件」の多くに該当することを明らかにしている。例えば、保健室における日常の性の相談を集団指導につなげる。そして、集団指導で得た気づきや感触を、日常の保健室運営にフィードバックするという、「良質な循環構造を作る」ことができることを明らかにしている。

また、教科担当でないからこそ、教科でそれぞれ教授された性に関する内容を、特別活動や総合的な学習の時間において、性の健康教育を実施し、教科の内容を統合する役割が期待できるのである。そこで、著者がおこなったユニット9・10を紹介し、「良質な循環構造を作る」や「教科の内容を統合する」について、具体的な実践事例を通して明らかにしている。そして、その実践事例の成果は、生徒から性の健康について「深い理解」が得られたことを実証的に確認している。また、性の健康教育の学習活動から、生徒の「生き方」に関する思考能力を高め、人格的な成長を促すこともできたことを示している。これは人格教育としての性の健康教育の在り方でもある。

第6章では、養護教諭への集団指導の支援と個別指導の支援を示している。そして、地域との連携方法にも触れ、養護教諭が性の健康教育における実践者の役割を担えるような、支援の方法についても論

述している。

審査結果の要旨

本論文は、性の健康教育を養護教諭の役割から理論的・実践的な研究を行ったものである。

本論文の成果は、次の四点である。

第一に、性教育、純潔教育、セクシュアリティ教育、性の健康教育のとらえ方を整理した上で、性の健康教育を明らかにしている。この論文でいう「性の健康教育」とは、「セクシュアリティ (sexuality) の事象に関する自律性 (autonomy) を身につけさせる健康教育」のことである。

第二に、1970 年代から、我が国における性教育が医学的立場から教育学の立場に移行した時期であることを示し、その理論的代表者である L.A.カーケンダールの性教育思想を明らかにし、そして担当者である教える側の「適格者の条件」を検討している。

第三に、著者の名付けた性教育の「二つ巴理論」によって性の健康教育を包括的に学校教育全体で行なう枠組みを提案している。

第四に、性の健康教育のプログラムを示し、高校生を対象にした授業実践及び現職研修の取り組みの成果を実証的に明らかにしている。

本論文は、以上のような成果を持っているが、性の商品化や情報化の検討が不足していると言わなければならない。今後の課題として研究されることを期待している。

学位については、学校における健康教育を研究対象とした理論的・実践的研究であることから、博士 (教育学) とすることが妥当である。

以上により、本論文は、博士 (教育学) の学位を授与するのに適格なものであると判定した。